

営農技術情報

発行 令和4年6月22日

第9号

たいせつ農業協同組合

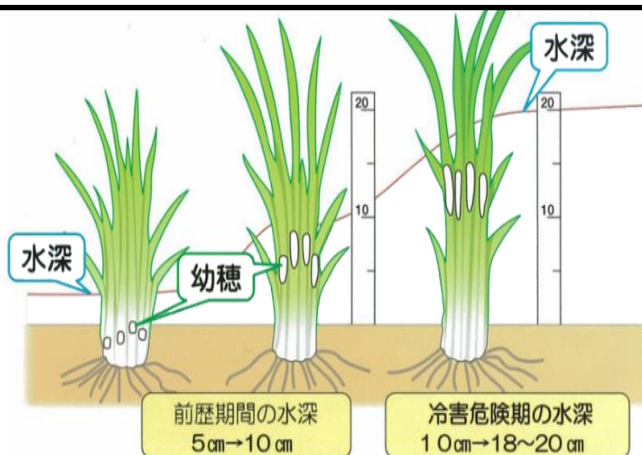
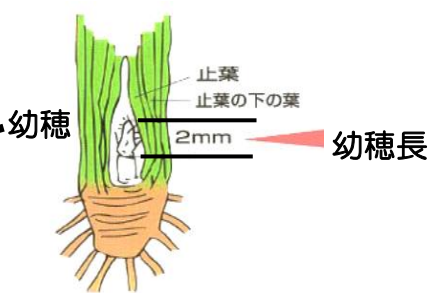
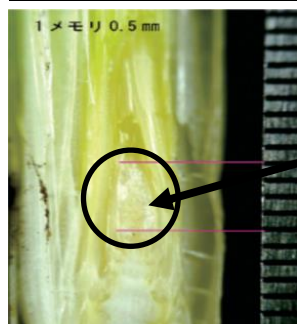
営農部 農産販売課

本所 営農センター 57-2357

支所 営農センター 87-4111

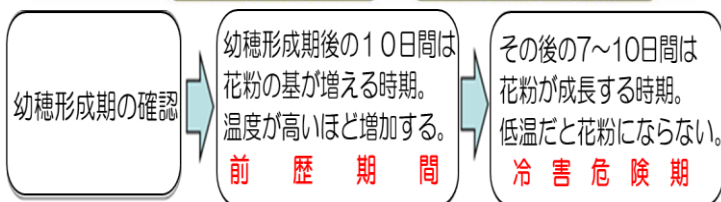
6月15日の生育調査によると、日照時間が長く水温の確保ができたため、作柄は平年並みとなっております。また、平年よりも幼穂形成期（平年6月27日）が早まることが予想されるため、移植の早いほ場を優先的に確認しましょう。

○幼穂形成期の確認・水管理について



Check!

平均的な株の主茎を3~5本取り、カッターナイフ等で縦に切断*して幼穂長を確認し、上図のように2mmに達していれば幼穂形成期です。
※手の怪我に注意！！



○ケイ酸追肥を実施しましょう

稲のケイ酸吸収は幼穂形成期以降に増加し、成熟期まで続きます。ケイ酸を追肥することにより葉が直立し、下葉にも太陽光が当たりデンプンの生成が活発化します。デンプンが多く生成されると1粒当たりのタンパク含有量が低下し、食味の向上が期待できます。また、根の活力増大や茎の耐倒伏性の向上なども期待できるため、ケイ酸追肥を検討しましょう（下表：主なケイ酸資材）。



施用資材名	使用量	使用時期	期待できる効果
粒状ケイカル ・ スーパーミネカル 等	20 kg/10a	幼穂形成期 1週間後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 精米蛋白含有率の低下 ・ 不稔発生の軽減 ・ 耐倒伏性の向上 等

- ・作業中は帽子と水分補給を忘れず、熱中症対策をとりましょう。
- ・農作業事故に十分注意しましょう。
- ・農薬散布の際には風の有無を確認し、ドリフト発生を確実に防ぎましょう。

